The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	特別企画 ： デザイン史研究と教育
Author(s)	橋本, 啓子
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100273
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特別企画：デザイン史研究と教育

日時：2024 年 5 月 25 日（土）14:30–16:30
場所：近畿大学東大阪キャンパス　33 号館デザイン・コモンズ（対面開催）
担当：高安啓介（大阪大学）　橋本啓子（近畿大学）

本研究例会企画には 11 名の会員が参加し，会場で配布された資料に沿って，大学におけるデザイン史教育が抱える問題について次のとおり意見交換を行った。

1. 本企画の主旨

事前に高安啓介会長から本企画について次のとおり予告があった。

「意匠学会は「デザイン史」を専門とする研究者を多くかかえ「デザイン史」を主要な関心事の一つとする学会であると言えます。そこで，次のような話題を持ち寄って，対面で意見を交わす機会を持ちたいと思います。①デザイン史と，工芸史・建築史・服飾史との関係はどうなのか。②デザイン史・工芸史・建築史・服飾史にかかわる授業シラバスの比較検討。③各研究において通史はどのような意味を持つのか。歴史とは何かという問い。④一般教養としてデザイン史などの通史を教えることの意味。⑤デザインの通史をどう語るのか。デザインの通史をどう教えるのか。デザイン史のスタンダードはありうるのか。」

2. 大学におけるデザイン史教育が抱える問題について

主旨を受けて，事前に 5 名の会員から提示されていた「デザイン史」および「近代／現代デザイン」科目のシラバスを糸口に，大学におけるデザイン史教育に関する論議が行われた。今井美樹会員（大阪工業大学），川島洋一会員（福井工業大学），多田羅景太会員（京都工芸繊維大学），谷本尚子会員（京都精華大学）の 4 名が担当する「デザイン史」はいずれも 19～20 世紀の建築・デザインの歴史を概観する内容であり，今井会員担当の同科目は 21 世紀現在から過去に遡るかたちでデザインの変遷を追う授業計画で，目を引いた。川島会員担当の同科目は一級建築士受験資格の要件を満たすため，授業内容の半分以上を建築史が占めている。高安会長担当の科目「近代／現代デザイン」はデザインの変遷をスタイル（時代様式）の変遷としてではなく，「近代」「構成」「空間」「環境」などの各スタイル（時代）を象徴する概念あるいはデザインの主要な要素ごとに分類してその変遷を辿る内容である。デザインの通史を語る方法としては，高安会長の方法とスタイルの変遷を追う方法のどちらも必要であろうという意見があった。

会場からは，佐々木一泰会員（滋賀県立大学）が，デザイン史を教授する際には各時代における日本と海外のデザインの比較を行っていると報告した。また，佐藤博一会員（京都芸術大学）は過去にグラフィック・デザインの歴史を教授した際，学生が授業から受けた刺激を見る方法として，授業で取り上げたデザイナーの作風を採り入れたグラフィック・デザインの制作を学生に課した経験を述べ，会場から興味深い試みとのコメントがあった。

「デザイン史」科目の教育における今後の課題としては，環境デザインやデジタル・デザインを積極的に含めるべきであるとの意見があったほか，評価方法についてはどの会員も頭を悩ませており，これ

についての情報が欲しいとの声があった。

3.『デザイン学入門（仮題）』に含める項目について

高安会長から学会の事業として『デザイン学入門（仮題）』の出版が構想されている旨，説明があり，目次の案が提示された。これを受けて，目次に追加・削除すべき項目について論議を行った。追加すべき項目として挙げられたのは，ファッション，プロダクト，家具，ディスプレイ，ふるまい，ゲーム・デザイン，情報デザインなど，削除すべき項目とされたのは製品，衣服などである。鈴木桜子会員（杉野服飾大学）からは，ファッションの世界においては「デザイン」という用語が，他のデザイン分野と異なる意味合いで用いられてきた歴史があり，そうした用語のニュアンスの歴史も考慮する必要があるとの貴重な意見が出された。『デザイン学入門（仮題）』の目次の検討はきわめて重要な案件であり，今後も議論を重ねる必要がある。

本企画は急遽決定した対面による開催であったため，多くの会員の参加は叶わなかったものの，上述のとおり活発な議論が行われ，大変有意義な会となった。今後も会員同士が忌憚のない意見を交わす機会を積極的に設けていきたい。

橋本啓子（近畿大学）